

まちづくり ひろしま

第55号 (令和3年9月15日)

読者数：662名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町 1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！



○旧市民球場跡地のイメージ図



○サッカー場東側広場のイメージ図



○Hihukusho ラジオ報告

ゲスト：高瀬 毅



○広島のみちとアートが重なる
活動紹介「平和大通り芸術展」

目次

- 巻頭言：今、問われているのは「文化力」「市民力」「行政力」
……………広島文学資料保存の会・代表 土屋時子
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・旧市民球場跡地にパーク PFI で事業者決定
 - ・第7回 響け！2代目平和の鐘 祈念式 (実施報告)
 - ・サッカー場建設地周辺の広場エリア整備にパーク PFI で事業者決定
- 特別寄稿：「被服支廠」の未来に関わろう：被服支廠を未来に活かす会 三宅恭次
- 広島復興の軌跡・人物編：米国人マイルス・ヴォーン氏：編集委員 石丸紀興
- ほっとコーナー：わたしの旅は、……………被爆体験伝承者 大河原こころ
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト ノンフィクション作家 高瀬 毅
- 「第3回平和祭再現劇企画検討会 (第1回)」報告
- 広島のみちとアートが重なる活動紹介：ギャラリーG 松波静香
- 本の紹介：原爆スラムと呼ばれたまち ひろしま・基町相生通り
- 編集後記：広島の大規模デザインは平和記念都市建設法 編集委員 前岡智之

□ 巻頭言

今、問われているのは「文化力」「市民力」「行政力」



広島文学資料保存の会・代表 土屋時子

「広島文学資料保全の会」のこと

1987年、ヒロシマに関わる文学資料の調査、収集、保存、そのための**施設建設**を求め、十一人の発起人の呼びかけで署名運動などを展開し、当時の広島市長に要望、活動がスタートした。十一人とは、沖原豊、磯貝英夫、今堀誠二、大原三八雄、北西允、栗原貞子、好村富士彦、四國五郎、立川昭二郎、深川宗俊、松元寛で、すでに皆さん鬼籍の人ばかりである。

「広島に文学館を！」という目標を掲げ、署名やカンパ活動を繰り返して行政への要請をし続けた。結成以来34年が経過するが、未だにその**施設＝文学館**は実現していない。その理由として、ある作家が「ヒロシマを象徴するような文学者が居ない」と言ったことがある。

果たしてそうであろうか。峠三吉、原民喜、栗原貞子、大田洋子、正田篠枝はじめ多くの広島の作家が存在し、また原爆を見た作家は命を賭して優れた作品を残している。にもかかわらず、中国地方で文学館のない県は広島だけである。これは広島がいかにか文化的成熟度が低いか、と言うことである。私たちは「広島は国際平和**非文化都市**だ」と言い続けている。

ヒロシマ文学を世界遺産に！

文学館建設の希望が持てない中、2015年、私たちは止むに止まれぬ思いで「原爆文学を世界記憶遺産に」の申請に取り組んだ。原爆文学の中で著作権や選定基準をクリアしている、①峠三吉著『原爆詩集』直筆最終稿 ②栗原貞子著『うましめんかな』直筆ノート ③原民喜著『夏の花』の下敷きとなった手帳 の三点をまずは申請した。「世界記憶遺産登録は、原爆文学の世界的認知を意味し、結果として危機に瀕した原爆文学資料の保全・活用にも繋がる」との思いからであった。

粘り強く世論にアピールし、国内外の研究者たちからも支援を受け、広島市への働きかけも功を奏し、広島市との共同プロジェクトとして登録申請を行うこととなった。しかしながら、1国2件の推薦枠に対し全国各地から16件もの申請があり、その年の国内選考には選ばれなかった。

2016年「世界記憶遺産」は「世界の記憶」と名を変えたが、ユネスコ自体が政争の場と化し、今年度まで国際登録の申請募集は中止となっていた。2021年ようやくユネスコの新制度が決まり、国際登録の申請募集が再開したので、9月7日に広島市と協議し、国内締切の10月15日迄に文科省へ申請書を送付することとなりました。ご支援宜しく願いいたします。

なぜ、「Hihukusho ラジオ」？

2019年12月、広島県は現存している最大級の被爆建物「旧陸軍被服支廠」の「2棟解体、1棟の外観保存」案を発表した。ある意味忘れられていた建物が県内外で注目の的となり、多くの県民の「解体反対」の声が沸き起こり、2021年広島県は従来の方針を転換せざるを得ず、耐震化そして保存・活用の検討を開始することとなった。

この方向転換の原動力は、実に幅広い人々の地道な市民運動によるものである。昨年2月に10代、20代から70代の「被服支廠の活用を考える人々」が集まり連絡会を立ち上げ、「Hihukusho LAB」というサイトを作った。そこの集まった数人でネットラジオを立ち上げ、いろいろな分野の人の声を共有しようと開始したのが「Hihukusho ラジオ」である。

昨年6月30日が第1回目、月2回配信、8月15日で28回目となった。40分のインタビューの他、文学コーナーでは文学作品などを紹介し朗読している。『まちづくりひろしま』でも要約を掲載してくださり、大変有難い。

被服支廠の未来が描け、再生する日まで、放送を続けていきたいと思う。

広島が真の「国際平和文化都市」となるために

私たちは原爆文学だけでなく、反核・平和に関わる全ての表現物を貴重な資料と考える。被服支廠の利活用は、戦争の記憶を継承する場とならなければならない。「ヒロシマ文学館」も実現させたい。峠三吉の『原爆詩集』の中の「倉庫の記録」は、作品の舞台である**場**に置かれるのが最もふさわしいと考える。

現在私たちは、大田洋子文学碑の移設に端を発し、中央公園広場で出土した旧陸軍の被爆遺構保存問題にも関わっている。専門家の知見を得て、市民と共に、貴重な遺構を活かす方法を探っていく姿勢が行政には全く無い。広島は歴史は近世・近代・現代と繋がっており、それぞれの文化が大事にされてこそ、文化都市と言えるのである。昨今の広島の都市開発を見れば、高層ビルや箱モノばかりを作り、町の歴史を鑑みたる街づくりをする、という発想がない。

SDGsの本質を理解し、被爆100年後には真の「国際平和文化都市」となるために、喫緊の問題にどう向き合い対処すべきか、厳しく問われている。

ひろしまのまちづくりの動き

① 旧市民球場跡地にパーク PFI で事業者決定！

広島市は旧市民球場跡地をイベント広場として整備・運営する事業者としてNTT都市開発を代表とする企業グループを決定。他に大成建設広島支店、広島電鉄、中国新聞社、広島バスセンターなど9社で構成され、整備から運用まで民間のノウハウや資金を活用する「パーク PFI」の手法を採用。イベント広場などの基盤整備は市が整備するが、飲食・物販施設などは事業者が負担し、2023年3月の開業予定。

事業者提案の内容

「市民の新しいライフスタイルへのゲート」と「地域全体の魅力と回遊性を高めるゲート」として「にぎわい溢れ、世界に誇れる求心力のある市民公園」を目標に掲げる。

特徴としては、旧市民球場の「かたち」を継承する外側の緑地帯と内側の緑地帯を形成し、平和の軸線上に桜並木のプロムナードを設けている。外と内の緑地帯の間に木造店舗群を点在させ、中央のイベント広場と一体的に利用でき、大型イベントや市民参加型イベントなど年間を通じて多彩な賑わいを創出するという。

平和記念公園と中央公園及び紙屋町の接点として魅力あふれる外部空間を期待したい。

② 第7回 響け！2代目平和の鐘祈念式 (実施報告)

- ◆ 日時：令和3年8月6日（金）9:30～10:00
- ◆ 場所：中央公園（2代目平和の鐘周辺）
- ◆ 主催：響け！平和の鐘実行委員会

今年で第7回となる祈念式は、コロナ禍のなか感染拡大防止のため、昨年と同様に実行委員会メンバーが主体となり簡素化して実施。

高東代表の挨拶、被爆者への鎮魂の黙禱に続き、復元整備を終えた平和の鐘の支柱につける鋳物の飾り鳩を広島市の湯崎緑化推進部長を招き除幕。

あわせて、鐘や鳩のデザイナーである片田天玲氏の遺族である亀尾ファミリーを代表して、泰慶（やすのり）君（小1）へ鋳物の鳩を贈った。

その後、提唱者の船越聖示氏による点打ののち、参加者全員で記念撮影。順次、参加者の点打となったが、2組目で鐘を鳴らすワイヤーがはずれ、やむなく解散。

復元整備された平和の鐘が今後も途切れることなく鳴らされることを願い、蝉しぐれの木陰のなか思いを新たに祈念式となった。

③ サッカー場建設地周辺の広場エリア整備にパーク PFI で事業者決定！

サッカースタジアムの建設の方は6月末に大成建設等共同企業体と257億円の契約を結ぶが、広島県負担の約45億円は未承認のままである。スタジアムの東西にある広場エリアについては、旧市民球場跡地と同様にパーク PFI による事業者公募を行い、8月末に優先交渉権者をNTT都市開発を代表とする10社の企業グループに決定。



提案者のイベント広場イメージ図



飾り鳩の除幕

(実行委員会 片平 靖)



提案者の東側広場イメージ図

求めた提案内容は、①飲食・物販施設・サービス等の賑わい施設の整備と管理運営、②賑わい創出のためのイベント企画、③中央公園全体のエリアマネジメントなど。

市は年間を通じて幅広い世代の県民や市民、観光客が楽しめる都会のオアシスとなる拠点を求めているが、旧市民球場跡地の広場とコンセプトはほぼ同じ。

採用された提案は「365日にぎわう公園」を掲げ、200万人の集客を謳っているが、立地の良い旧市民球場跡地のエリアを超えるような集客を求めるのは無理がある。都市公園に賑わいばかりを追うこと自体が問題を抱えているのではないか。

また旧陸軍輜重隊の被爆遺構を蔑ろにしたまま解体撤去したことは禍根を残すだろう。

□ 特別寄稿

「被服支廠」の未来に関わろう

被服支廠を未来に活かす会代表 三宅恭次

8月6日、「原爆の日」式典に参列した田村厚生労働大臣は記者会見で「旧陸軍被服支廠の国所有1棟も保存を選択肢として検討する」と表明。広島県所有の3棟については5月に耐震化の方針が出ており、これで現存する最大級の被爆遺構4棟すべてが事実上「保存→利活用」の方向性が見えてきた。

2019年12月、広島県が「被服支廠3棟のうち1棟外観保存、2棟解体」の方針を公表すると、この衝撃度は大きく、マスコミは大きく取り上げ、被爆者団体や政治家から保存を求める声が上がった。

さらに県がこの方針に対する「パブリックコメント」を求めたところ、全国から6割を超える保存を求める意見が寄せられた。このため、県は2020年度予算に計上していた「解体関連予算」を凍結せざるを得なくなった。

国や県が一旦計上した予算を執行できず、最終的に未執行にすることは瑕疵以外はほとんど起こりえないことで、しかも事実上、保存を求める世論の声によって決まったことは、今後の「利活用」にむけても大きな力になる、というか**我々県民・市民は「保存が決まった。あとは行政に任せよう」ではなく、「保存」の経緯からして、利活用について積極的に意見を出し、関わっていかねばいけ**ない。

すでに昨年から広島県の担当部局へ利活用案を提案している団体もいくつかある。この保存運動の先頭に立ってきた旧被服支廠の保全を願う懇談会は「戦争と平和記念館」を・・・、このほか平和関係の美術、文学コーナー、演劇、コンサートスペースを設けることやこの被服支廠を拠点に比治山一宇品一瀬戸内海の島々へのツーリズムの提案などもある。

わたしは利活用については**この建物の歴史をしっかりと見据えた上で「被爆建物には強く拘らない」との視点から「私案」を提示している。**

戦前、旧陸軍の軍服、軍靴などの兵站基地→原爆投下時、被爆者の救護所→高校仮校舎、大学寮→運送会社倉庫・・・この数奇な運命から1棟はこのストーリーを体感できる施設とする。例えば道路側の壁面いっぱい熊野高校書道部などにより峠三吉の「倉庫の記録」を墨書してもらう。インターネット放送局を設け、「今」のヒロシマを世界に常時発信する基地にする。14棟あった巨大な被服支廠を実感できるジオラマ等々・・・。

重要文化財指定の可能性が高いといわれているが、単に見学施設にせず、不断に人が出入りし、交流・学び・遊び・創造の場にする。

特にこの巨大被爆遺構は住宅地に隣接している街中の建造物である特殊性から地域住民との共存・交流の場も設ける。

重文の動態保存のモデルとして東京に「自由学園明日館」がある。これに倣ってコンサート会場、結婚式場などのホール機能、レストラン。近隣の人たちが主に利用できる文化講座、集会スペースなど・・・。

さらには宿泊施設を併設する滞在型舞台芸術の創造活動拠点。これは「アーティスト・イン・レジデンス」と言われるもので、広島の知名度を生かした世界の「アートセンター」になりうると思う。

いずれにしても繰り返しになるが、利活用について、行政に預けるのではなく我々市民・県民が参画して作り上げていく環境を醸成し、行政当局に強く働き掛けていかなければいけないと思う。

保存の経緯からして、行政に全面委任することだけはしないことだ！

○ 広島復興の軌跡・人物編 (第27回)

～広島復興に対して早期に画期的な提案をした通信社副社長米国人マイルス・ヴォーン氏～

はじめに

直接現実の計画や事業に関わらなくとも復興の軌跡をたどる上で欠かせないとして、今回も直接的な関係者というわけではないが、広島復興計画思想構築の過程に関与したと思われる外国人を取り上げる。その人は米国人の報道関係者UP東洋方面副社長マイルス・ヴォーン氏(ボーン表記の場合あり)からの提案である。その提案は昭和22年7月29日付中国新聞ということで、驚くべき戦後早い時期での提案であり、その内容を検討したい。(以下敬称略)



1. マイルス・ヴォーン氏の提案

昭和22年の中国新聞に掲載されたのは「**広島こそ平和のメッカ／建設せよピカドン記念公園・博物館／中国新聞讀者に寄す／UP副社長ヴォーン氏手記**」という見出しで、長文ではないが、中国新聞の一面トップでの掲載であった。広島に重大な関心を寄せる米国記者団一行が広島を訪れ、中国新聞に一文を寄せたというのである。新聞社としては最大限の受け止めをしたのであろう。見出しにおいて「**広島こそ平和のメッカ**」というスローガンを掲げ、全世界から共感を得ようという意図が見られ、流石情報機関のトップを務める関係者の認識を見せたのである。

「われわれの知る範囲において広島市内に未だにピカドン被害を保存する目的をもった記念公園(メモリアル・パーク)がまだ計画さえもされていない・・・」といい、日本通であることを自認しての発言のようで、「記者団の信ずるところによると、かかる公園を建設することは市としても、歴史的興味からいっても将来世界各国から旅行者を引き付けるところの甚大な価値を有するものだ」と畳みかけ、「最後に自分が広島市民に望むところは何かの形式においてピカドン博物館の建設をのぞんでいる。その博物館にはピカドンに関するすべての資料、写真などが陳列されるだろう」と自説を展開している。すなわち、原子爆弾に関して博物館を記念公園とともに建設すべしという、まっとうな提案である。

これが昭和22(1947)年7月であるから、被爆後2年を経過しない中での提案でありいかにも早い、全く最初というわけではない。爆心地付近に公園を、記念施設を、という考え方は県当局の初期の構想でも、昭和21年2月に開設された広島市復興審議会での提案でも、復興顧問のジョン・モンゴメリーによる提案などでも提起されており、それらのことをヴォーンが知っていたかどうか不明であるが、それにしても早い時期であったことは確かであろう。

2. 記念思想の源流、さらにどう実現、具体化につながったか

欧米においてはメモリアルという名の施設や道路等がよくみられる。オーストラリア・キャンベラのウォーメモリアルとは戦争記念館であり、戦争に関連した情報や資料を多く収蔵している。人の名を冠した施設もよく見られるところであり、明らかに過去の偉人を記念しての施設であろう。日本でも記念という思想は古くからあり、大東亜記念館とか、明治記念館とか昭和記念公園といった表現の施設が見られるので、馴染のない発想ではない。とはいえ、ピカドン記念公園という発想は、恐らく当時の日本人、広島の関係者にとって果たしてすぐさま馴染んだであろうか。歴史的建物の保存という考えも、戦後外国人から継承したところがある。しかし原爆ということになると、微妙な思考形態となる。

「**広島こそ平和のメッカ**」というのは、すでに広島が平和のメッカになっているというよりは、メッカにならなければならないという趣旨であろう。著しい犠牲を払った広島進むべき方向を示し、具体的には、「**建設せよピカドン記念公園・博物館**」ということであって、まさに後に実現する「平和記念公園そのもの」をイメージさせるものであり、「原爆資料館」に直結する提案に思える。すなわち、広島はこの提案通りに進み、実現させたのであろうか。

3. まとめにかえて

ヴォーンの真の意図は何であったか。外国人からの提案はいくつか存在したが、恐らくそれらは善意からのものであろうが、多少とも啓蒙的、開明的あるいは独善的な意図があったかも知れない。太平洋戦争を仕掛けた日本がそのままではいはずがない。戦争を起こしたことで反省しているとはいえ、本当に平和に向かって進むのだろうか。ヴォーンも先の提案の後半に本音ともいえる思いを吐露している。それが、「記者団の多くは広島市の建設について広島市民が健闘している様には敬服した。我々一行はともに敗戦とこの惨事

の後にあえぐに対して成功を祈っているものだ。米国としてはこの厄介なピカドン日本に使ったことを非常に後悔して。しかし、米人の解釈するところはこれにより戦争の期間を短縮し従って多くの命を助けたことである。」とある。広島が平和のメッカとして機能すれば波風を立てないで、世界的に歓迎されるであろう。この方向で広島の復興を果たしてくれれば望ましいことであろう。

ヴォーンの提案がどのように扱われたか、どのような影響を及ぼしたのか、その提案の実現、具体化の実態は明らかではないが、まさに望まれた方向であり、占領政策とも矛盾がなければ、実現の道が確保されたのである。広島が、さらにこの方向性の中で「形の上での実現へ」動いて行ったのである。

米国の日本の扱い方針の転換、そして日本自身も経済復興による敗戦国路線からの脱出へと、波乱含みへ出発していく。ヴォーンの意図を飲み込み、したたかに変容していくのであった。

参考文献：昭和22年7月29日付中国新聞、回顧五年原爆ヒロシマの記録（瀬戸内海文庫、1950）、広島新史都市文化編他

マイル・ヴォーンの略歴：詳細は不明であるが、インターネット・ウィキペディアによると Miles Walter Vaughn（1892-1949）、ネブラスカ州生まれ米国人。カンザス大学卒業後1915年UP（後、UP通信社とINS通信社が合併してUPI通信社）入社のジャーナリストとある。1924年から太平洋及びアジア方面の報道担当しており、戦後再来日して東京に滞在。1947年副社長、1949年東京湾で遭難死、死後、「ボーツ・上田記念国際記者賞」が設立されている。

（編集委員 石丸紀興）

□ ほっとコーナー

わたしの旅は、・・・

被爆体験伝承者 大河原こころ

わたしは今広島市西区に住み、将来カフェを開業する夢のためカフェで働きながら、被爆体験伝承者をしています。現在31歳、独身、一人暮らしです。

広島市に住み始めたのは四年半前です。出身は福島県田村市。そういうと「避難ですか？」とたまに聞かれますが、避難ではなく、自ら選んで広島市に移住しました。

広島市に住む前、私は移住先を探していました。20歳から四年半、夢を追って東京都に住みましたが、田舎生まれのわたしに、大都会の空気は合わず。

ある夏の夕方、西新宿の高層ビル街でヒグラシの声を聞きました。懐かしくなり立ち止まると、それはパチンコ屋の前に設置されたラジカセからでした。大都会のラジカセに閉じ込められたヒグラシが、猛烈に哀しくなり、私は新たな移住先を探す旅に出たのです。

まず向かったのが、沖縄県北部、「やんばる」と呼ばれる地です。海の前にそびえ建つリゾートホテルのレストランで、住み込みの仕事を始めました。

もちろん、そこで暮らしがよければ移住するつもりでした。

結果は、長時間労働がキツすぎて、また、沖縄の独特の空気にいまいち馴染めなくて、約3ヶ月で去ることになりました。

「沖縄は住む場所ではなく、遊びにくる場所だなあ。」という思いを残して。

次に向かったのは大分県の温泉地「湯布院」です。

着付けを覚えたかったので、旅館で仲居の仕事をしました。

着付け、和室での作法、料理の知識等を短期間で叩き込まれました。時々お局に嫌味を言われながらも、暫くは頑張りましたが、熊本大地震で湯布院も大きく揺れ、あえなく退散。約2ヶ月間でした。

次に訪れたのは広島県宮島です。ここでも旅館で仲居の仕事をしました。広島は肌が合ったようで、約半年間働きました。休みの日に市内へ繰り出すことも多く、そうこうしている間に知り合いも増え、知り合い伝で次の仕事も決まり、そのまま市内へ移住となりました。

無事移住先探しの旅は終わった訳です。

ひとつの旅が終わわり、さて、じゃあ広島で、何が出来るだろう？と考えて、始めたことのひとつが、被爆体験伝承者の研修を受けることでした。三年間の研修の末、今年の春に、正式に伝承者となりました。

この先は、記憶の継承と自分なりに向き合いながら、いずれはカフェを開き、古民家に住み、あわよくば家族を持ち、畑を耕す、そんな暮らしがしたいです。

わたしの旅は、まだまだ終わらないようです。



○ 『Hihukusho ラジオ (第26回) 2021.7.15 (*リンク参照)』 報告

昨年の6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (*リンク参照)」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第26回目の高瀬毅氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター : 土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト : 高瀬 毅 (ノンフィクション作家)

インタビュアー : 瀬戸麻由 (シンガーソングライター)



—自己紹介—

1955年、長崎市生まれの被爆2世。両親や親せきも多く被爆しているが、悲惨な状態ではなかったためか、親からよく戦争や被爆や昔の話を聞いて育つ。それで歴史好きになったか。18歳に上京し、明治大学卒業後、ニッポン放送に就職。

記者、ディレクターを経てニッポン放送を退社し、出版社を経て1989年にフリーとなる。

—ニッポン放送時代—

あこがれていたマスコミの報道部の記者として日々のニュース記事を追う。そのうちテーマを深掘りしたくドキュメンタリーに関心が移る。1982年にラジオドキュメンタリー「通り魔の恐怖」で日本民間放送連盟賞最優秀賞を受賞し、この道で生きていく決意。

会社の都合で企画部門に配属されるが、自分の現場志望との乖離を感じて1987年に退社。

—師 伊藤明彦さんとの出会い—

伊藤さんは1960年に入社した長崎放送を1970年に退職。「被爆者の声を記録する会」を立ち上げ、私財を投じて全国の被爆者から取材し、1979年までに103人の被爆証言を収録。

被爆者Aの証言に感激したが、後にその証言が疑わしいことが判明。しかし、被爆者Aはいろいろな被爆者の話を聞き、自分なりの物語に結晶したものと解釈して「被爆太郎」として捉えた。その顛末をまとめ1980年に「**未来からの遺言～ある被爆者体験の伝記**」を出版。

伊藤さんのジャーナリスト魂に魅了され、1980年に会いに行く。週末になると伊藤さん宅に泊まり込み、多くの教えを請い、ジャーナリストとしての原点となる。ただ、フリーになった時には原爆の問題に真正面から取り組む覚悟が定まらなかった。

—長崎の特殊事情—

長崎放送が制作した「**神と原爆**」というドキュメンタリービデオを見て、浦上天主堂の廃墟の荘厳な姿に心打たれる。当時の田川市長も保存を唱えていたのに、なぜ被爆のシンボルとして残すことができなかったのか？ 長崎には広島原爆ドームのようなモニュメントがない。長崎は完全に間違った選択をしてしまった。なぜ？

その経緯を検証するために渡米までして資料を集め、2009年に『**ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」**』を出版。

米ソ冷戦時代の当時、アメリカは親米派を増やす施策を取り、その一環で長崎もセントポールと日米初の姉妹都市となる。田川市長もアメリカに招待され、懐柔されたのか？ 帰国してからは宗旨替えをし、浦上天主堂廃墟の保存の意向を撤回する。

長崎はヨーロッパからカトリックが入ってきて、寒村から発展した街であり、浦上地区に信徒が多かった。しかし街の中心部は神社や寺の信者が多く、江戸時代から明治6年までキリスト教徒は弾圧されていた。

また地形的に入り組んだ山に遮られて爆心地の浦上地区以外は被害が少なかったこともあり、「原爆は浦上に落ちたとさ」と言う人がいる。そのため長崎市民の一体感が少なく、それが保存運動が盛り上がらなかった理由の一つと考えられる。

また浦上教会もいつまでも仮聖堂でミサを続けることができず、解体して新しい聖堂の建て替えを要望した。市長も反対せず、1958年に解体される。

—広島のみちについて—

原爆ドームの存在の大きさを改めて感じているが、長短あり。特に世界遺産になってからは世界の注目が高まり、原爆ドームに行けば平和教育ができる、或いは市民も原爆ドームさえ残せばいいという原爆ドームに全部背負わせている感が否定できない。



2019年末、被服支廠の解体論が全国ニュースとなり、2020年の1月頃知る。現地を見ると、建物の巨大さと訴えてくる力に驚いた。加害の歴史をも併せ持つこの施設は何としても残してほしい。

遺構を見れば、アーティストとしてのひらめきや政治家としての発想など多々あると思う。残っていれば目の前で説明することができ、歴史を伝えることができる。

可能な限り大事な遺構は残してほしい。遺構があれば、意見がぶつかり合うこともあるが、それはチャンスであり、理解を深め合意点を探る、そのプロセスこそが大事。

一被服支廠の保存活用について一

学術的な場、エンターテインメントの場、人の交流の場、いろいろな活用案が出てくると思う。また行政と民間の役割分担でも葛藤があるであろう。「被服支廠を活用して世界に平和を発信する」という一点だけは堅持しながら、大いに議論し、そのプロセスをマスメディアやSNSなどで広く公開しながらより良いものにしていけばよい。

原爆ドームを保存できたことは、市民の議論や運動によって成し遂げた広島の「成功体験」である。被服支廠も加害の歴史を持つ遺構として保存活用できれば、もう一つの実績となり、広島存在をより一層世界にアピールすることができる。

コメント

広島と長崎は被爆都市としてよく並び称されるが、その歴史と背景は大いに異なり、現在の姿も違うことがよくわかった。外から見た意見も貴重である。

(編集委員 瀧口信二)

○「第3回平和祭再現劇企画検討会(第1回)」報告

8月6日に合人社ウエンディひと・まちプラザで開催予定だったが、コロナ禍で急遽臨時休館となり、Zoom会議に切り替えて第3回平和祭再現劇企画検討会が開かれた。

石丸紀興氏が第3回平和祭の再現劇を提唱し、ピースグラント2021に採択されたことにより、仲間呼びかけ、今年度内の実現に向けて検討する運びとなった。

☆ 第3回平和祭とは

第3回平和祭が開かれた1949年8月6日は広島平和記念都市建設法が公布された日であり、その法律を具現化する平和記念公園及び記念施設設計コンペ当選者(丹下健三チーム)の発表の日である。さらにこの法律が制定されることを受けて、新たな決意のもとに平和祭を開催するため平和祭専用の平和の鐘(2代目)を製作して点打している。

当時の浜井信三広島市長は、この法律を踏まえて広島を世界平和センターにしたいという崇高な理想を平和宣言として高らかに謳い上げた記念すべき画期的な平和祭である。

☆ 再現劇の意義と目的

この平和祭をできるだけ忠実に再現し、記録に残し、後世の人たちに引き継ぐことは歴史的にも学術的にも意義深いことと思う。

ただ、演劇の素人が行う再現劇であり、予算も限られているので、観る人にどれほどの感動を与えることができるかは未知数である。願わくば、この挑戦が捨て石となって、本格的なドラマ化が実現することを期待する。

第3回平和祭は、広島平和記念都市建設法の制定の動き、平和記念公園及び記念施設設計コンペの結果、2代目平和の鐘の製作など、注目すべき内容を伴っており、シナリオ次第では感動的なドラマが可能である。

☆ 再現劇の内容ほか

石丸氏が資料に基づき、平和祭の式典次第に準じて脚本を書き、仲間内で希望者を募って配役を決め、朗読劇のように台本片手に演じる。

会場のセットなどは簡単なものとし、再現劇終了後は、出演者による第3回平和祭をテーマにしたディスカッションを行う。

上記の劇及びディスカッションは映像にまとめ、ピースグラントに報告すると共に関係者に配布する。さらに可能ならユーチューブなどで配信する。

☆ 今後の予定など

- ・次回検討会で日程及び会場などを決定し、配役及び裏方などの役割分担も検討予定
- ・3回目の検討会で台詞合わせ及び舞台稽古を実施予定

〇広島のみちとアートが重なる活動紹介

ギャラリーG（一般社団法人 HAP）松波静香

広島市中区上八丁堀にある「ギャラリーG」は、アーバンビューグランドタワーという高層ビルの公開空地に位置するアートギャラリーです。設立から17年を迎えますが、公共性を重視する立地にも関係し、当初からギャラリーでの展示のみに留まらず地域と関わるプロジェクトも行ってきました。その中から私自身が携わった近年の事業をふたつご紹介します。

<平和大通り芸術展>

平和大通りに新しいにぎわいを作るための社会実験のひとつとして広島市などが主催し、2018、19年の2回行われました。ギャラリーGは企画・運営に関わることができました。

歩きながら美術作品に出会い、その人々が何かに思いを馳せながら広がって行って、広島を文化の血流が巡っていくというイメージから、この展覧会では平和大通りを文化の大動脈と位置づけました。

会期中はワークショップやマルシェイベント、コンサートなども開催しました。2回目は平和大通り緑地帯に加えてホテルのロビーや旧日本銀行広島支店でも展示を行いました。広島市立大学の協力を得て卒業制作・修了制作の買い上げ作品を展示したり、ウォークラリーや、毎日行うギャラリーツアーも開催するなど、1回目よりさらに実験の場を広げました。

ギャラリーや美術館へ足を踏み入れるという芸術鑑賞へのハードルのようなものは平和大通りの緑地帯には存在しないので、普段わざわざ鑑賞に行かないというかたにも自然に関心を寄せてもらえことができ、これをきっかけにギャラリーを訪れるようになったという人もいました。

建物の中だけで意識を完結してはもったいない。ギャラリーを運営する側の私自身にとっても、まちなかでのアート鑑賞の展開と平和大通りの大きな可能性を感じる企画となりました。

たった2度しか行われていない社会実験ではありますが、行政の方やNPO、アーティスト、様々な方と一緒に作りあげるプロジェクトで、緑地帯で作品を展示するまでの具体的なプロセスや運営に関する課題など、実際にしてみたからこそ得られた経験がたくさんありました。たとえ小規模でも、こういった実験は継続して積み重ねていく必要があると思います。

<ひろしまアートシーン>

こちらは新しいウェブサイト制作のプロジェクトで、新型コロナウイルスの影響で危機となった文化芸術に対する広島市からの支援金によって実現できたものです。

このウェブサイトは、広島のアートシーン情報、開催中の展覧会情報がまとまって見ることができるのが特徴です。アーカイブとしても情報が残るようになっていて、運営開始から数ヶ月経った今すでに120以上の展覧会が公開され蓄積されています。

ギャラリーマップとしての機能もあり、場所の概要やSNSへも簡単にリンクすることができます。それぞれのギャラリーが行っている活動を集約するシンプルなウェブサイトですが、欲しい情報が手に入りやすくなり、県内外の方がギャラリー巡りに利用してくださっているようです。

また、アーティストへのインタビューや大学生によるレポートなど、有志による記事の寄稿も徐々に掲載していて、さまざまな広島のアート情報へ接続できるプラットフォームとして機能しはじめているように思います。

にぎやかな企画を打ち出すことも街を盛り上げるには必要ですが、すでに日常的に根付いているものを見直すことも必要かもしれません。単発のイベントだけではなく、継続的に発信とアーカイブができるようなプラットフォームをコツコツ作っていくことも、広島のアートシーンを活性化するための方法になりえると思います。今後もこのサイトの運営を続けていきます。

みなさんもぜひギャラリー巡りにご利用ください。 <https://hiroshima-artscene.com>



ひろしまアートシーンのトップ画面

○ 本「原爆スラムと呼ばれたまち ひろしま・基町相生通り」の紹介

著者：石丸紀興・千葉桂司・矢野正和・山下和也

1970年に当時の広島市千田町に存した広島大学建築学専攻の院生たちが修士論文のテーマに選んだのが「原爆スラムと呼ばれたまち」であった。

戦後、原爆ドームの北側に位置し、相生橋東詰めから三篠橋まで太田川沿いに伸びる土手道（相生通り）一帯が原爆スラムと呼ばれ、1000戸を超えるバラック住宅がひしめき合っていた。

そこには、「スラム」と呼ばれたバラック住宅の外見的なイメージとは異なり、迷路のような「みち」には住民の共有空間として活気があり、明るささえ漂っている人たちの姿があった。それは失いかけていた現代都市の「すき間」の「ヒューマン空間」の発見でもあった。

基町地区再開発事業が始まって間もない1970年に、撤去される前の「基町/相生通り実態調査」を行い、更に1979年に元居住者の9年後の追跡調査を行っている。

この本は、相生通りの発生から消滅までを可能な限り記録しようとしたものであり、調査後半世紀を経て、消滅したまちの一つの証となり、更にはこれからの基町・広島のあり方を探る一助となることを期待している。

注) 定価：2200円（税込み）、出版社：あけび書房、発行：2021年7月26日



□ 編集後記

広島の大規模デザインは「広島平和記念都市建設法」

まちづくりの要素を、人・物・ことと言うけれど、私はこれらにときを加えたい。

今、私たちの街広島は大きくその姿を変えようとしている。その目標は、市の総合計画等で明確にされているが、都市の具体的な大規模デザインは不在である。ときを踏まえた大規模デザインがそれぞれの場所にあって、そこに働き・学び・暮らす人たちが、共有して、守り育てていくことがまちづくりの本質である。

この大規模デザインこそ広島を復興に導いた「広島平和記念都市建設法」に他ならない。昭和24年8月6日に市民広場（現在の旧市民球場跡地）で開催された第3回平和記念式典において（この法律の市民投票は7月7日七夕選挙と呼ばれ、大多数の賛成により成立した）お披露目された事はよく知られている。その結果、現在の道路・公園・主な公共施設が国や世界からの支援によって整備されていった。

明日の広島を考えると、このことを踏まえたものでなくてはならない。

（編集委員 前岡智之）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

（投稿は500字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	響け！平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表